



# CNEAS

Center for Northeast Asian Studies  
東北大学東北アジア研究センター



People and Publicity

Center for Northeast Asian Studies

Tohoku University

## センター長挨拶

東北アジア研究の課題の重心が大きく変わりつつあると感じている。従来その基軸は、ロシア・中国・日本などに跨がる環境問題の解決や経済交流を実現するための学際的知識を紡ぎ出すことにあった。今後は、この地域の過去と現在における対立・紛争・戦争の起源とその対応や解決への道筋というテーマが中心になるのではないかと思うのである。それは、諸研究分野の問題意識や方法はもちろんのこと、学際的知識の枠組みにまで及ぶのではないかと考えている。

その理由は、2022年のロシアのウクライナ侵略にはじまる「戦争」にある。この出来事によって、対立のグローバリズムへと世界は変わった。すでに構造的な変化の兆しはあったが、それが不可逆的なものであることを決定づけたと言っても良い。欧米諸国は厳しい制裁を課し、これにロシアが反発する構造ができあがっている。外交は無論のこと、経済交流や学術交流も大きく制限されているのが現状である。加えて世界各地での紛争の顕在化が連動している。

私が関わっている北極研究はまさに冷戦崩壊によって可能となった学際科学であった。ソ連末期に、北極海環境問題解決のための国際的な協力のための制度とそれを支えるための科学委員会が整えられ、欧米諸国とロシアさらに日本や中国・インドなどが関わる体制ができたからである。これを基盤にして、その後、自然科学と人文・社会科学が共同し、気候変動の影響評価が行われるようになった。手前味噌になるが、フィールドを共有する文理連携研究の最も成功した例といえるかもしれない。しかし、2022年以降、北極は二つに分かれた。もはや従来

のような学術の国際協力体制を復活させることは想像困難な状況になってしまった。人文社会科学の優先研究課題は、二極化された北極の安全保障や政治社会的な領域に移りつつある。自然科学もロシア抜きで観測・解析をせざるをえず、従来の研究のあり方が変わっていかざるをえない。

翻って考えてみると、東北アジア研究センターは1996年に発足し、その始まりは冷戦崩壊後による旧ソ連との交流開始がきっかけであった。ある意味で北極研究と類似した歴史的背景を持っている。すでに2022年以前から、ロシアや中国は権威主義国家としての認識されるようになっており、隣国理解としての東北アジア研究ということが我々自身の課題にもなっていた。おそらく今後はこの地域の平和共存へ資する学際的知識を発掘していくことがより一層重要になっていくだろう。

東北アジア研究センターの強みは、人文学・社会科学・自然科学の個々の専門分野において世界的に活躍する優れた研究者がいることだけでなく、彼らが文理を超えた学際的協力を実施してきたという点にある。この点は東北大学の中で我々の誇るべき点である。生物学と歴史学・考古学、人類学と水文学・地質学など枚挙にいとまがないが、その文理を含む学際的な研究成果は、国際的にも着目されている。こうした基盤のもとに、私たちは新しい東北アジア研究を発展させていかねばならないと思うのである。

センター長 高倉 浩樹



## 研究紹介

### ●ロシア・シベリア研究分野

寺山 恭輔 / TERAYAMA Kyosuke (教授)

スターリンの作り上げた体制をより深く理解するため、干渉戦争の再来を懸念して彼が強い関心を寄せた1931年9月の満洲事変勃発後のソ連極東地方に対する様々な政策とそれらのソ連全土への影響を研究している。主な考察対象は、兵士・労働者や物資の輸送、シベリア鉄道の複線化やバム鉄道の建設等の動員力強化、軍需産業の構築、感染症撲滅のための衛生対策、気象観測網の拡大、通信網の構築、ラジオ網の構築による国内外に向けたプロパガンダ、食料の備蓄、全国民に対する軍事教育等、秘密裡に行われ未解明の様々な国防力強化策である。

J-GLOBAL : 200901070306910856

高倉 浩樹 / TAKAKURA Hiroki (教授)

ロシアを理解するためには、現在200近くの民族集団が暮らしていること、かつて中央アジア及びアラスカにまで広がる植民地を持っていた歴史を視野に入れなければならない。シベリアは、この点で現在においても内国植民地である。そこは、数多くの先住民族が暮らす空間であると共に、豊富な天然資源を基盤にした経済開発が進行する地域だからである。筆者はシベリアのエスニシティ・ナショナリズムについて研究する一方で、人類史的視点を含む極北の文化生態史、さらに気候変動の影響評価などに取り組んでいる。

J-GLOBAL : 201501018786770477 ORCID : 0000-0002-1470-6173

パホモフ・オレグ / PAKHOMOV Oleg (助教)

社会的なヒステリー、大恐怖、集団的暴力のうねり、ある一定の条件の下で、新規の政治機関を歴史条件に適応させて組成する特別なメカニズムとして機能し得る。社会文化的心理学に基づく、集団的精神病の現象は、集団／個人の行動を制御する外的メカニズムである集団的情緒の歪みの

複合体として定義できる。現在取り組んでいるのは、ロシア国家の形成・経過について、集団情緒の歪みの一連のサイクルとしての分析である。ロシアの集団情緒の歪みの複合体は、16-17世紀にキリスト教的終末論に基づき最終的に形成された。基盤となるのが死との文化・心理的相互作用である。このような重要な政治制度の形成について、中央集権の官僚主義ヒエラルキーの形成、また民族国家の形成についても研究する。

ORCID : 0000-0003-2530-0854

### ●モンゴル・中央アジア研究分野

岡 洋樹 / OKA Hiroki (教授)

公文書史料を用いて清代モンゴルの社会構造、行政統治、社会変動などについて研究を行っている。これまで、清代モンゴルのザサグ旗を事例とした研究を行う一方、北元末期から清前期に至るモンゴル支配体制の形成過程に関する研究を行ってきた。近年は、『清朝理藩院満蒙文題本』所収の家畜窃盗事案に関わる題本を用いてモンゴル人の越境移動の様態に関して研究するとともに、清代ザサグ旗がいかなる範囲の衙門と文書を往来させていたのかを、内モンゴル・オールドス・ハンギン旗を事例として研究している。

J-GLOBAL : 200901097635224047

佐野 勝宏 / SANO Katsuhiko (教授)

人類の進化と石器の製作・使用体系の発達の関係について研究している。特に、人類の形質的な進化や認知能力の発達が、人類の道具作りや道具の使用方法にどのように影響したのかに注目している。現在は、ホモ・サピエンスだけが地球上のあらゆる地域に拡散して人口増加を実現したのに対し、旧人や原人等の先人類は絶滅してしまった背景をより良く理解するための調査研究に取り組んでいる。そのため、旧石器時代の食糧獲得

において重要であった狩猟技術の発展に注目し、人類の進化と狩猟技術の発展の関係について調べている。

J-GLOBAL: 201001060985228975 ORCID: 0000-0002-0839-8549

柳田 賢二 / YANAGIDA Kenji (准教授)

世界のほとんどの地域は多民族からなる多言語社会である。国、民族、言語の境界は一致しない。言語は、複雑多様な形で人間にとって外的な社会文化環境の一部となる。また他方、ある言語の母語話者にとって当たり前である区別が、他の言語の話者にとっては全く想定外の区別であることがいくらかもある。しかも、母語における区別とは、ただ単に言語によって常にこれを強要されている恣意的なものであるにも拘わらず、それが言語による強要であると認識されない恐ろしい「内的環境」でもある。この外的環境、内的環境の両面から言語に関わる研究を行う。

J-GLOBAL: 200901067636472315

## ●中国研究分野

明日香壽川 / ASUKA Jusen (教授)

環境問題およびエネルギー問題に関して、その実態および歴史的経過を解明するとともに、どのような具体的な対策が必要であり、かつ技術的・政治的に可能であるか等の問いについて総合的かつ多角的に研究を行う。特に、地球温暖化問題や越境汚染問題のような国内外の様々なステークホルダー間の合意が必要な問題に関して、政治経済的な具体的な制度設計を中心に、諸外国および日本における具体例を参照しつつ、技術的な側面も十分に考慮しながら、主に政治学、経済学、社会学、倫理学、法哲学などの社会科学の側面から定性的・定量的に検討する。

上野 稔弘 / UENO Toshihiro (准教授)

中国において漢民族以外の諸民族が多く分布する辺疆地域を主たる対象として、帝国体制の終焉でゆるやかな統合が解体されたこれらの地域が、国民国家建設により多民族国家中国の一部として領域的・人的に統合・再編される20世紀前半期の歴史的過程を研究している。世界各地の文書館などに所蔵されている関連文献資料の収集・分析を進めることで、今日の中国の民族問題につながる歴史的背景の解明にあたりるとともに、それを通じて東北アジアの多民族社会に対する理解を一層深め、さらには東北アジアの民族共生に貢献することを目指す。

J-GLOBAL: 200901058049007317

石井 弓 / ISHII Yumi (准教授)

オーラルヒストリーによる中国人の戦争記憶の研究を行っている。日中戦争の最前線だった山西省孟県での調査によって、村人たちの戦争記憶(体験・非体験)を開き取り、地域や歴史との関連のなかで戦争の集合的記憶や記憶の世代間継承を分析してきた。並行して、同地域の雨乞い復活を調査し、地域コミュニティのレジリエンスや、コミュニティの人と人をつなぐ歴史物語(『趙氏孤児』)の役割について考察している。『趙氏孤児』が啓蒙期ヨーロッパで広く受容されたことから、中国(農村)と啓蒙期ヨーロッパの交流についても研究を進めている。

J-GLOBAL: 202301020100108975 ORCID: 0000-0001-7851-2231

## ●日本・朝鮮半島研究分野

石井 敦 / ISHII Atsushi (准教授)

専門は国際政治学・科学技術社会学、扱っている問題領域は越境大気汚染、漁業資源管理、捕鯨問題、気候工学である。現在、日本の環境外交の要因分析、うなぎの資源管理に関する超学際科学研究に従事している。特に、後者については、フォーカスグループインタビュー、ステークホルダー分析、レジームコンプレックス、国内資源管理政策の比較分析を行っている。

## 出版物紹介

### 『東北アジア研究』

東北アジア研究の発展に貢献することを目的とした査読制学術雑誌。1996年創刊。

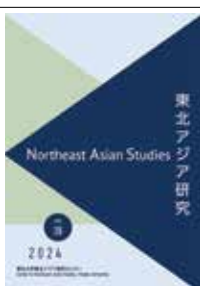
第28号(2023年)目次

#### ●論文

日本におけるモンゴル料理—新しい食の提供と消費についての人類的研究

川口幸大 包双月(ポウ サラ)

China between Historical Knowledge and International Politics: With Special Reference to Prewar Japan's View Exemplified by Naitō Konan and Yoshino Sakuzō / 李宥霖



学術活動としては、Frontiers in Climateのreview editorを務める。また、環境政治・ガバナンス研究会を主宰しており、常時、発表者を募集中である。近著は大久保彩子氏(東海大学)と共著の「Pursuing sustainability? Ecosystem considerations in Japan's fisheries governance」(Marine Policy誌、第152巻)である。

ORCID:0000-0002-3111-6626

デレーニ・アリーニ / DELANEY Alyne (准教授)

私の研究は、沿岸地域に住む人々のアイデンティティ、幸福感、場所への愛着、文化遺産のなど、さまざまなテーマを通して、人々と環境とのつながりについて考えることである。海との環境的なつながりを調査する中で、漁業ガバナンスや、里海や「海業」といった新しい概念も取り上げてきた。私の研究は、儀式や祭り、オーラルヒストリーなど、人類学的な視点に立ったものであると同時に、自然科学者との学際的共同研究においては、社会科学を取り入れてもいる。社会的持続可能性と回復力に長年関心を寄せており、災害復興や気候変動に関する研究も行っている。

J-GLOBAL: 201901016827992100 ORCID: 0000-0002-0516-1343

程 永超 / CHENG Yongchao (准教授)

主に17~19世紀日本・朝鮮・中国三国関係史について研究している。壬辰戦争(1592~1598)後、日本・中国の間には国家間の正式な外交がなく、政治外交関係としては、かろうじて朝鮮王朝と琉球王国を介する希薄なものと考えられるようになった。私は朝鮮王朝を介した日本と中国の間接的な政治関係に着目し、中国・朝鮮・日本(幕府・対馬藩)の史料を比較検討しながら、東アジア国際関係史を再構築しようとしている。また、天文学者と協力して、歴史史料から過去の天文現象と気象現象を解明している最中である。

J-GLOBAL: 201801001730339504 ORCID: 0000-0001-9932-4029

宮本 毅 / MIYAMOTO Tsuyoshi (助教)

火山噴火が発生した場合には周辺地域に多大な災厄がもたらされる。東北アジア地域には複数の火山が存在するが、噴火が自然界(人類史)に与える影響を知るためこの地域において過去にどのような火山活動が行われてきたかを、日本、中国・北朝鮮において有史後に噴火したとされる火山を対象としている。特に10世紀に大陸と日本で同時期に発生した白頭山と十和田湖の2つの大規模噴火に焦点をあて、フィールド調査を通じて噴火の推移や、噴火がもたらした自然界への影響について検討している。

J-GLOBAL: 200901086699393851

## ●地域生態系研究分野

千葉 聡 / CHIBA Satoshi (教授)

私たちの研究室では、さまざまな空間的・時間的スケールで生物多様性が進化するプロセスを明らかにすることを目的として研究を進めている。特に、貝類、昆虫類、爬虫類、扁形動物などの生物群を対象として、フィールドワークや野外実験によるマクロな仕組みや、ゲノム解析により遺伝子レベルの仕組みの解明に努めている。生息する系統のユニークさと高い多様性により、世界的に高い進化的価値を持つことで知られる、日本を含む東北アジアの生物相の起源と保全のための研究に取り組んでいる。

J-GLOBAL: 200901099098503778 ORCID: 0000-0001-9273-0307

木村 一貴 / KIMURA Kazutaka (助教)

極東ロシアからベトナム・フィリピンにかけてのアジア地域は高い生物多様性を示すホットスポットの一つである。この地域の生物をモデルとし、生物多様性の創出・維持メカニズムについての研究を行っている。また、人新世とも言われるこの時代において、人為的な動植物の絶滅という悲劇は今後も数多く起こることが予想されるが、それを少しでも防止できるよう生態系保

#### ●研究ノート

1930年代初頭ソ連極東における食料問題と「特別国防ファンド」の創設  
寺山恭輔

Feminist Hospitalities, Para-sites and Parasites  
Jennifer CLARKE

#### ●書評

野本禎司・藤方博之編『仙台藩の武家屋敷と政治空間』東京:岩田書院、2022年、352頁 / モリス, J. F.

于海春、『中国のメディア統制—地域間の「不均等な自由」を生む政治と市場—』東京:勁草書房、2023年、216頁 / 内藤寛子

福士由紀ほか編『暮らしのなかの健康と疾病—東アジア医療社会史』

東京:東京大学出版会、2022年、278頁 / 荒武賢一朗

Joshua D. Zimmerman, Jozef Pilsudski: Founding Father of

全の手法改善にも貢献したいと考えている。特に、人為的改変にさらされやすい沿岸域や淡水域の生物相の把握や絶滅危惧種・侵略的外来種の現状・生態学的特性の理解に積極的に取り組んでいる。

J-GLOBAL: 201401087879938720 ORCID: 0000-0003-1091-2313

## ●地球化学研究分野

辻森 樹 / TSUJIMORI Tatsuki (教授)

原生代・顕生代造山帯の地質と岩石に記録された地球の変動の歴史とプロセスを研究。プレート境界岩(変成岩)を対象に沈み込み変成プロセスの総理解と一般化を試み、国際的な成果を上げてきた。超低地温勾配域の実像を、天然のローソン石エクロジヤイトから解析し、同種の岩石の研究ブームを引き起こした。前弧の蛇紋岩に伴う翡翠(ひすい輝石岩)の分類を提唱し、それが国際的に広まった。先端的な研究手法を積極的に取り入れ、沈み込み帯流体の特徴と挙動の理解に貢献した。国際学術雑誌10誌で編集役員を担当。

J-GLOBAL: 201801011522141291 ORCID: 0000-0001-9202-7312

平野 直人 / HIRANO Naoto (准教授)

東北アジアの沿岸、海溝沿いに沈み込む太平洋プレートは、プレート境界型巨大地震や多くの島弧型火山を発生させている。それにもかかわらず、太平洋プレートの実体が分かってきたのはごく最近である。この科学的進展を後押ししたのは、2000年代以降の重点的な海底構造探査や、プレート境界断層岩の採取、高感度海底地震観測網の構築、そしてプチスポット海底火山の発見であった。研究室ではプチスポット火山の岩石や地質から、プレート直下の深部マントル組成や太平洋プレートの構成岩を探り、新たな太平洋プレートの実体を探求している。

J-GLOBAL: 200901073369508933 ORCID: 0000-0003-0980-3929

後藤 章夫 / GOTO Akio (助教)

火山の噴火には溶岩を静かに流出するものや、火山弾や火山灰を激しく噴出する爆発的なものなど、様々なタイプがある。それらはマグマの物理的な性質、特に流れにくさを示す粘性係数が大きく影響するが、噴火時にマグマが水と接触するかといった、噴火が起こる環境も大きく関わる。私は溶岩の粘性係数が火山現象に及ぼす影響をおもに実験的手法により研究するとともに、ここ数年は仙台近郊の蔵王山と鳴子火山で、それぞれの火口湖である御釜と濁沼の活動度評価と、その地下水流動系の解明を目指した調査を行っている。

J-GLOBAL: 200901039820745770 ORCID: 0000-0001-8398-7100

## ●環境情報科学研究分野

田村 光平 / TAMURA Kohei (准教授)

ヒトを含む生物が、次世代に情報を継承する手段として、遺伝と「文化」の伝達がある。それらの相互作用——遺伝子・文化共進化——を通じた生物学的・文化的多様性の理解を目指し、現在は数理モデリングや統計解析といった定量的な方法を軸にしつつも、さまざまなアプローチで研究を進めている。同時に、個人が把握できる限界を超えた膨大なデータが蓄積されていること、学術の蓄積が困難な社会状況になりつつあることなどを踏まえたうえで、新しい理解の方法やそのための研究基盤の構築にも取り組んでいる。

J-GLOBAL: 201601003337041151 ORCID: 0000-0003-2014-5410

## ●上廣歴史資料科学研究部門

荒武 賢一郎 / ARATAKE Kenichiro (教授)

17～19世紀日本における政治・経済の実態を明らかにしながら、社会全

体の枠組みについて分析を進めている。政治史では、近世武士と領民の連携を示す地域行政機構の組織や、財政支出の具体相を明らかにしてきた。経済史においては、日本と近隣地域を含む海運のあり方を解き明かしながら広域的な商品流通に関心を持ち、その担い手である商人たちの活動を中心に都市と農村の関係にも注目している。これらの考察には、武家・商家・農家の古文書を不可欠とするが、東北地方に伝来する歴史資料の調査から、自身の研究課題への活用を試みている。

J-GLOBAL: 201201056410639911 ORCID: 0000-0002-9405-6616

竹原 万雄 / TAKEHARA Kazuo (助教)

近世・近代日本の感染症をめぐる国家・地域・人びとの対応を研究している。痘瘡・コレラ・赤痢・ペストなどの感染症が毎年のように流行した19世紀後半、明治政府は欧米から衛生行政を導入し、前近代以来の感染症対策を大きく変更した。新たな対策をめぐる受容・反発、貧困者・予防従事者への救済、流行現場における偏見・差別、終息後の地域経済の復興など、さまざまな視点をふまえながら過去の感染症をいかに乗り越えてきたのかを追っている。

J-GLOBAL: 201701020984591839

根本 みなみ / NEMOTO Minami (助教)

私が主要な研究課題としているのは近世武家社会における「家」と「御家」の関係性である。近世武家社会では、大名家臣の「家」は帰属集団である「御家」に包摂され、その存続に依存したとされてきた。しかし、近年の研究では家臣も自分の「家」の存続に強い関心を持っていたことが明らかにされてきた。そこで、こうした成果を踏まえ、近世武家社会を生きた人々が自分の所属する「家」とそれが帰属する集団である「御家」の関係をどのように意識したのか、彼らの行動や主張の中から明らかにしていきたいと考えている。

J-GLOBAL: 201901004268920227

## ●研究支援部門情報拠点分野

滕 媛媛 / TENG Yuanyuan (助教)

私の主な研究関心は、人口移動、移住(定住)意識の形成、居住環境とウェルビーイングとの関連性である。最近、私は以下の3つのテーマに重点を置いて研究を進めている。第一に、中国で活発に行われた都市開発によって土地を失った元農民世帯の都市への再定住と社会経済的状況の向上との関連性の解明である。第二に、在日外国人の居住環境とその統合との関連性の解明である。第三に、東京一極集中の問題に対応するための地方移住が促進される背景において、日本人の国内移住(定住)意識のメカニズムの解明である。

J-GLOBAL: 201901021344156924 ORCID: 0000-0002-6569-9188

## ●マイノリティの権利とメディア研究ユニット

志宝ありむとふて / Alimtohte SHIHO (特任助教)

東アジア及びイスラーム地域における哲学、政治、社会等の比較研究を学際的・総合的に行う、及びその史的展開の解明である。具体的には、東アジア地域における近代化の過程で中央アジアテュルク系ムスリム及び中国ムスリムの存在が日本・中国・欧米でどのように「再発見」され、中央アジア・中国イスラーム研究がいかにして創始・発展してきたのかという「近代の学知としての中央アジア及び中国イスラーム研究学術史」の分野に向かっている。

J-GLOBAL: 201701010203826652

Modern Poland, Harvard University Press, 2022, 623p / 寺山恭輔

## 『東北アジア研究センター叢書』

東北アジア研究センターの共同研究や個人研究の成果に関する出版物。

第75号 白石片倉家中・佐藤家文書—宮城県蔵王町・近世在郷武士の記録を読む—(荒武賢一郎、白石古文書の会、2024)

第74号 文政10年東北農村の御用留—須賀川市桑名家文書から—(荒武賢一郎、武田作一、2023)

第73号 江戸時代の漂流記と漂流民—漂流年表と



漂流記目録—(平川新・竹原万雄、2023)

第72号 仙台藩宿老後藤家文書—由緒・職務・武芸—(野本禎司、南郷古文書を読む会、2023)

## 『東北アジア研究センター報告』

シンポジウム報告、資料集、国内外の研究交流を目的としたシリーズ。2010年より刊行。

第30号 カムチャッカ先住民の言語と生活: ライフヒストリーと回想 2巻(ロシア語)(永山ゆかり・T.A. グロワネワ・エフドキヤ・プローニナ、2022)

第29号 A Desire for Continuity: An Anthropological Study of Family Life through



『東北アジア学術読本』

東北アジア地域の自然・歴史・文化・社会に関わるアクチュアルな研究成果を、一般読者に向けて発信。2011年より刊行。

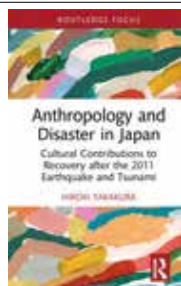
第9号 東北アジアの自然と文化 2(東北大学東北アジア研究センター編、東北大学出版会、2023)  
 第8号 古文書がつなぐ人と地域—これからの歴史資料保全活動—(荒武賢一朗・高橋陽一編、東北大学出版会、2019)



『東北アジア研究専書』

専門家・知識層や大学生等を対象にした東北アジアの地域研究に関する学術専門書。2012年創刊。

第31号 Takakura, Hiroki, *Anthropology and Disaster in Japan: Cultural Contributions to Recovery after the 2011 Earthquake and Tsunami*, Routledge, 2023  
 第30号 災害<後>を生きる——慰霊と回復の災害人文学(李善姬・高倉浩樹編、新泉社、2023)  
 第29号 華南—広東・海南の文化的多様性とエスニシティ—(瀬川昌久、風響社、2023)



その他の著書

- ・クリスティアン・グラタルー著、辻森樹日本語版監修『地球史マップ 誕生・進化・流転の全記録』(日経ナショナルジオグラフィック社、2024)
- ・Shiho, Alimtohte, *Islam in China and the Islamic World: A History of Chinese Scholarship*, Gorgias Press LLC, 2024
- ・千葉聡『ダーウインの呪い』(講談社現代新書、2023)  
 千葉聡『招かれた天敵 生物多様性が生んだ夢と罠』(みすず書房、2023)
- ・根本みなみ『家からみる江戸大名 毛利家 萩藩』(吉川弘文館、2023)
- ・アリムトヘティ『イスラームと儒学—「回儒学」による文明の融合』(明石書店、2022)
- ・山下晋司、狩野朋子編『文化遺産と防災のレッスン—レジリエントな観光のために』(新曜社、2022)
- ・堀内香里『清代モンゴル境界考—遊牧民社会の統治手法と移動』(明石書店、2022)
- ・程永超『華夷変態の東アジア：近世日本・朝鮮・中国三国関係史の研究』(清文堂出版、2021)
- ・瀬川昌久『客家—エスニシティの形成とその変遷』(風響社、2021)
- ・Masahisa Segawa, *Ancestral Genealogies in Modern China: A Study of Lineage Organizations in Hong Kong and Mainland China*, Routledge, 2021
- ・是恒さくら・高倉浩樹『災害ドキュメンタリー映画の扉 東日本大震災の記憶と記録の共有をめぐる』(新泉社、2021)

東北アジア研究センター地域研究デジタルアーカイブ

<https://archives.cneas.tohoku.ac.jp/>



プロジェクト研究

ユニット名	期間	代表者
マイノリティの権利とメディア研究連携ユニット	2022-2027	高倉 浩樹
「国連海洋科学の10年」対応ユニット：超学際科学を用いた漁業政策評価	2023-2025	石井 敦
地質研究資料アーカイブと試料キュレーティング	2023-2025	辻森 樹
20世紀前半ユーラシア史再考研究ユニット	2023-2027	寺山 恭輔

共同研究

研究領域	期間	研究タイトル	代表者
環境問題と自然災害	2023-2025	鳴子火山火口湖・潟沼の火山活動調査	後藤 章夫
	2023-2027	災害時における障害者の脆弱性の研究	ボレーセバスチャン
移民・物流・文化交流の動態	2022-2023	歴史資料学の実践—福島県須賀川市における地域史研究—	荒武 賢一朗
	2023-2024	更新世末から完新世初頭における環日本海の人類の移動と地域適応	鹿又 喜隆
	2022-2023	ホモ・サピエンスの東北アジアへの拡散と文化的適応プロセス	佐野 勝宏
	2023-2024	東北アジアの先史時代移行期における人類の行動変容に関する痕跡学的研究	佐野 勝宏
	2021-2024	東北大学狩野文庫所蔵朝鮮通信使関係資料の基礎的研究	程 永超
	2022-2023	在日外国人の社会統合と地理的要因との関連	藤 媛媛
	2022-2023	地域間交流と農業の持続可能性に関する文化人類学的研究—東北地方のホップ農家を事例に	越智 郁乃
自然・文化遺産の保全と継承	2023-2023	ミスジマイマイ種群の遺伝的構造の解明	木村 一貴
	2023-2023	「CNEASモンゴル地質試料コレクション (CNEAS-MNGSC)」の整備	辻森 樹
	2023-2024	道東太平洋岸の地質基盤が支える独特な地形・気候・沿岸生態・地域産業とその地域普及活動	平野 直人
	2023-2025	近世東北アジアの交流と情報	荒武 賢一朗
	2022-2023	仙台藩における支配機構と政策決定の総合的研究	荒武 賢一朗
紛争と共生をめぐる歴史と政治	2023-2026	戦争記憶の国際的比較研究	石井 弓
	2023-2024	清代モンゴル社会における自生的秩序生成に関する研究	岡 洋樹
	2023-2025	ウクライナ侵攻後のロシアからの大量出国とモンゴルにおける民族間関係	高倉 浩樹

最新の研究動向はこちら

[http://www2.cneas.tohoku.ac.jp/research/labo\\_ex/](http://www2.cneas.tohoku.ac.jp/research/labo_ex/)

